繪本直指寳

七

繪本直指寶巻之七目録

十雪之圖

韓王堂　伊川門

袁安洛　李愬淮

王猷溪　李及郎

蘓武羝　鄭綮驢

孫康書　歐陽詩

輦
下官二人
睡形畫

韓王堂雪

帝星夜度紫微宮　滕六先驅擁玉驄

立處袍生鳳紫向　坐間煙暖地爐紅

家々數百年天下　晋棄兩三盃酒中

榻外有人方鼾睡　夢回花月小樓東

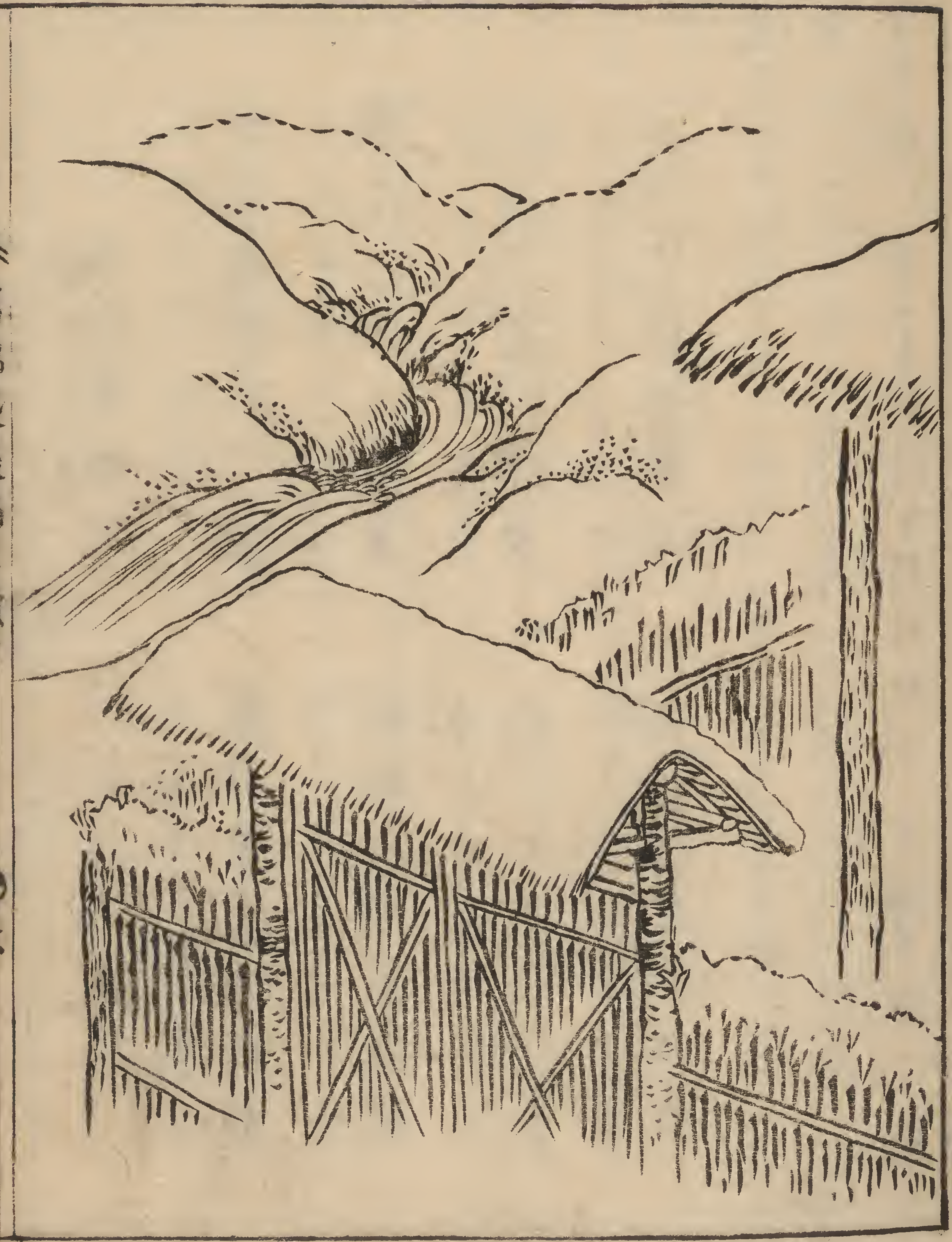
皇天乃紫微太垣ある帝星乃座なり天下中央にありて統べる万邦乃中央よりまします四方を照し仁徳を施し政化を行ひ給ふ乃象也よつて天子乃ことを紫宵とも紫宮ともいふなり詩の心は唐の太祖大雪の夜御駕をうながして朝廷の大臣趙普が門をたゝく事ありて滕六は雪の神なり故に雪の異名をいふ草木の花ハ五瓣なれども雪は六つなり故に六出花といふ奇なる六つの花とよめりいかなるときも天子の御幸なれば滕六先驅し奉りて大祖乃御供をし擁護なす氣色なり御衣より降かゝる雪はあたかも紫鳳をもちうるが如く太祖すでに至りたまへば重ね茵を設け紅爐をまうけて宴を催す趙普が妻は肉をあぶり御酒を進む太祖の曰吾膝に一榻乃外に鼾睡する他人の家也故に来りて卿を見るとて酒宴の中に江南をうばんの策略さだめなりとなり

伊川門雪

戸屨天寒侍講帷　先生瞑目坐如尸
太函立久已潛悟　尺瑞積深渾不知
白屋雪生初見頃　紅爐點化且休時
一家教法清和異　伯子春風更可師

河南の程伊川先生は宋朝の大儒にして孔孟道学の奥旨を悟り性理学に明らかなりき当時の群英其門に入りて教を受る人数多し

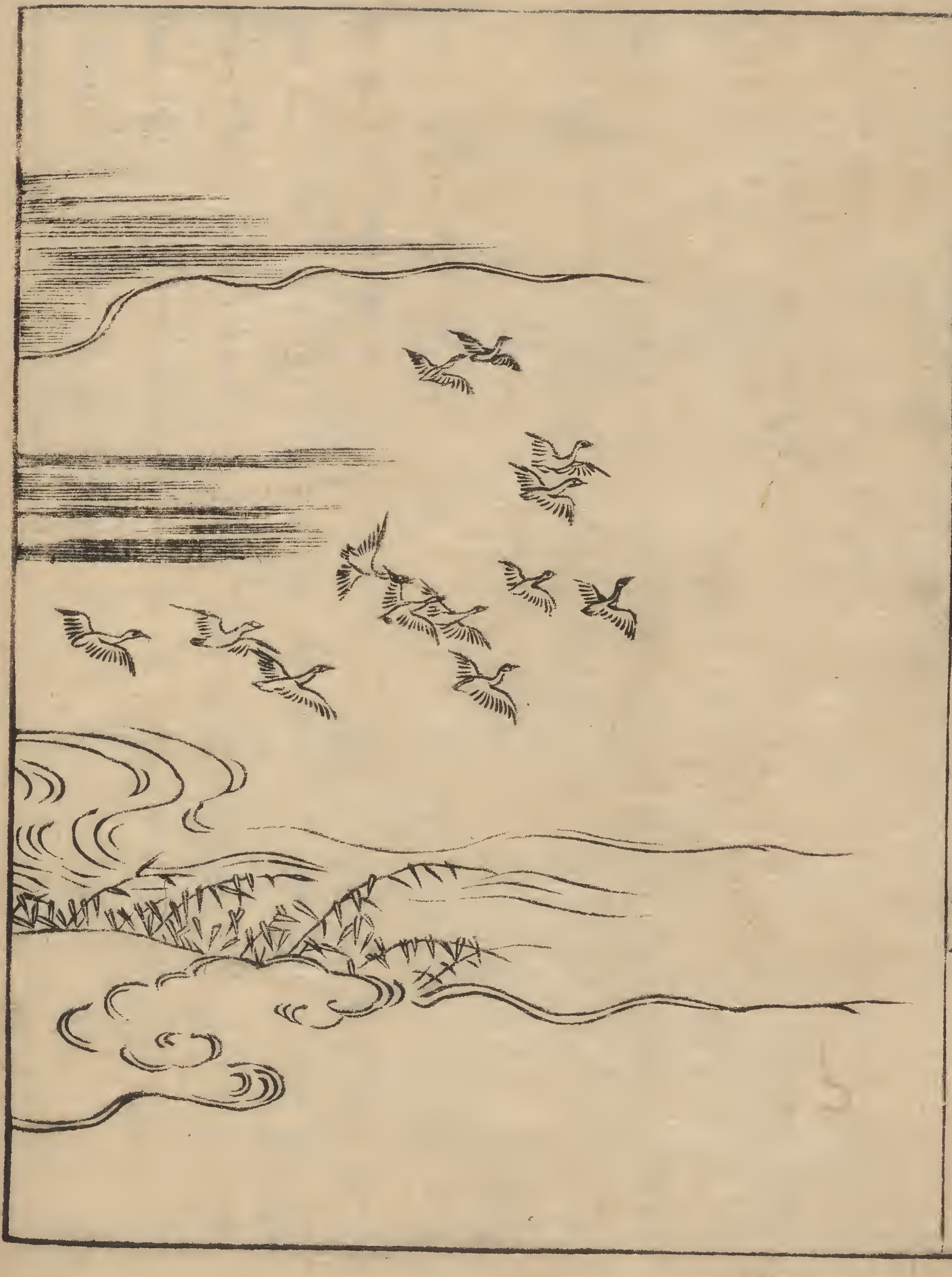
游定夫楊中立といへる二士其徳をしたひ伊川に見んと先生の許に謁する時先生いまだ目を瞑りて坐し給へり故に二士は講席の帷のもとに立て侍事久し時に天寒く雪降出て止ず遂に遠近の民屋も皆白くなりぬしかりけれどもなほ身の囲爐も消ずてありければ雪は豊年の祥瑞なれば其の尺の瑞ともいふべき先生目を覚して見給へば二士なほ講帷のもとに立り先生驚て云二士なほここにありや日既に晩ぬ退て休息せよとて師の命によりて二士門を出れば雪の深さはむすでに尺余なるべしとぞ伯子は伊川の兄明道先生なり程氏一家の教方は春風の万物を育ふごとし程伊川の事に同く兄の明道先生の事にまで与りぬめり



袁安洛雪

世界瓊瑤別一般
飛花上下山河異
無過客来行跡少
立身太節當然耳
出門半歩即風寒
臥榻中門天地寛
作干人態此時難
豈意清高却得官

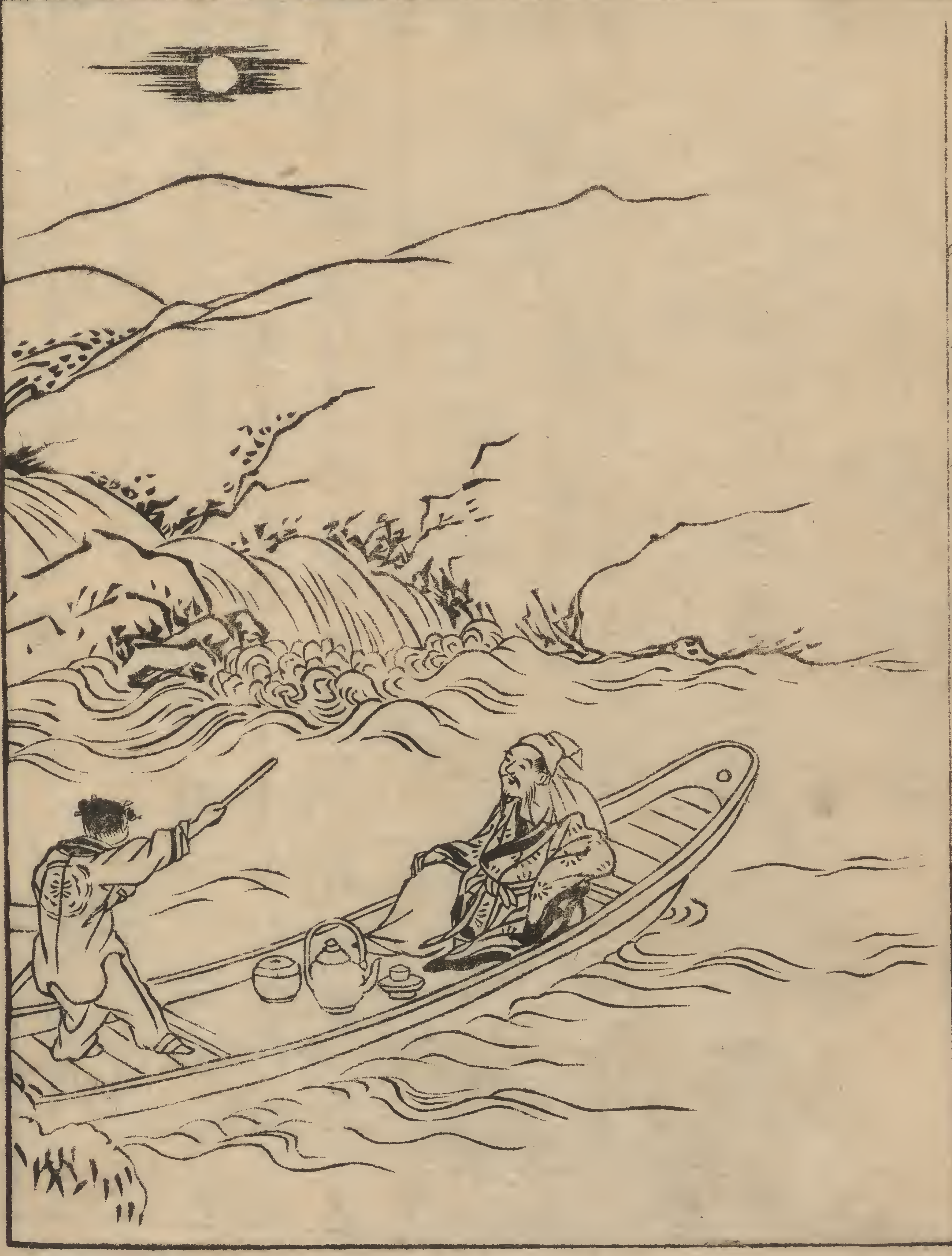
漢の時大雪ふりて一丈ばかりに及ぶ世間あまねく白き玉をしきて家居を造りなすしやうにまた山も樹も連が雪賦に庭に満る瓊瑤を列林ハ瓊樹に擬き
ありしかバ風情なり空に散ふ雪を乱り飛花のごとく山に満てる白峯そびえ河ハ氷れ寒氣に結んで氷門となれり此時洛陽令自ら出て民の家々を問われる民家みな門前の雪を除て出たり袁安が門ハしまりて都て人の往来せし跡もなかりしバ袁安既に餓りたるまし人死やしらんとて左右の者に雪を除させ内に入て見れバ袁安ハ飢して臥してえだて居るを眺して臥居たり河南令問て云ふ他の民どもハ皆出て此大雪に除られたりし事を歎くに汝何として出ざるや安が云ふ大雪ふりハ人皆餓て死を宜しく人を干をかりんとせり令賢人なりとて朝廷へ奏し孝廉に挙られその後は意高くや清高却て官を得たりと云々



李愬淮雪

玉龍戰罷舞殘鱗　常侍乘虛夜進兵
糟馬疾騰乘殺氣　池鵞亂擊雜軍聲
文城風急嚴師律　洄曲雲低歷賊營
士女迎門笑相語　曉來春滿蔡州城

李愬といふ名将蔡州の敵を攻くだせとの詔命を奉じ既に兵を引卒し蔡州へ發向を夜半に懸瓠城にいたりける折ふし雪乃最中なれば厳寒肌を徹す官軍進みかねあやぶみけるに大雪降しく路をうづみ寒風はげしく吹てさながら玉龍乃天空に戦ひ罷で残乃鱗を舞もちおほく敵の方にも兼て知るよしもあらざれば陣営をほどく戦く待ち懸しがよりや此大雪なれば官軍進みまじきとて甚しく油断しけるを大将李愬は敵の此の様子を察し其虚に乗じて官軍を進め城近くの池に鵞鴨の数の水鳥多くむれ居たり李愬謀軍に命じて鵞鴨を驚かしければ其羽音旁れにまぎれ百万の勢乃遠に寄来るをしらず敵兵大に乱れさわぎ討るる者数を知らずに遂に敵の城柵を破り忽ち平治に城中乃士女李愬をむかへ入て太平の功を祝ひ楽しみけり



王猷渓雪

心事微茫対曲流　夜寒風定六花収
山川一色天如画　上下交光月在舟
自酔自吟懐渺々　興来興去永悠々
帰歎怕折堂前竹　首向平和如昨不

晋乃王子猷ハ名ハ徽之ハ内史王羲之が子なり　俗学多才にして細節に拘らず当時に名を得たり　嘗て堂の前に竹を植て此君と名付て愛られ竹の甚だし事円乃虚なるを歎ずるの句あり　そぞろに覚ゆる也　山陰に居る時大雪乃夜中眠さめて酒をのみ左思が招隠乃詩を詠じ忽ちむかし友なる戴安道が事を思ひ出し時より　安道ハ剡渓といふ所に居すれば　よりて剡曲の流に棹さし舟を浮べて行けるに寒き夜風も吹さへ降り雪もやみ晴さまる　六花ハ雪の異名なり　四方の山川も皆白そめになりければ一色に宿るむ月も晴わたりて白玉のごとく地も雪に浮て上下の光をまじへ漕行舟に月を乗てその風情いはんかたなく酔ますれバ古詩を吟じ悠々と安道が門にいたりながら門をもたゝかず帰りける　人その故を問ければ子猷答て元と興に乗じて来る今興尽て帰る　安道に逢に及ばずといひしとなり

李及 郊雪

漠々長堤緑紫漫　使君来扣招隠関
天寒誰信五馬出　湖凛惟随一鶴還
林麓清無群後混　梅花冷伴二翁閑
他事向集舣舟月　別去先生不汗顔

林和靖名ハ逋字ハ君復道号あり孤山に隠居し常に西湖に遊びまだ市町に出ざるの比杭州乃大守李及薛映和靖と交ハりふかし大

雪乃おり節和靖を訪ひ行あり漠々と物さびしき長堤をそゞろれば緑あらたまり散漫としてあさ町も緑紫を飛まがふばかりにして和靖が隠舎を訪く清淡をとふに大守乃来りしとハ誰ろしらん信ぜざりしほどに五馬は大守の称号なり隠の九卿乃制より起れる故事なり和靖居て二ッの鶴を畜ひおきて西湖に棹さして遊ぶ時若客人あれバ此鶴飛行て和靖に告しらす和靖やがて是を見て帰りぬ然ども俗人と混じ遊ばず又梅乃清香を愛して幽閑の情ありて伴ひける今和靖先生につゝきさる家乃辰をたのしむ塚されども厳寒の時ありあるらぬ為ハ顔に汗せざりしなり此末句にて天寒乃烈しき事ほ結び終りぬ

蘇武羝雪

蘇武羝雪

海上羝閑十九年　孤臣凛死不叫天
忍將膝與羊倶蹲　誓把心同節共堅
襄髩霜飛甘臥窖　剛腸氷透只餐氈
當時不為求名牧　千古高飛更凛然

漢の武帝乃時單于といへる戎王命にしたがはず中をとれば中國に怨をなし邊境を犯す事度々に及びければ武帝甚だ憂ひ大軍を發して征伐せんと思ひ

あれども其道遼遠なれば軍用乃費ゆるしがたくよつて和親のはかりごとをなし蘇武を使として胡國の孫賀をのべ單于がもとへつかはしけるに蘇武彼國にいたれども單于は悪逆の戎なれば蘇武を捕て漢に降参さすずあながち土窖乃中に入て飲食をもあたへざれば蘇武を固く志をまもりて單于に從はず大雪乃ふりつもりたる雪を噛ふて死せず單于神人也とし海穀させず海上へ追放ち羊を牧しむること十九年に及ぶ漢朝の貴臣として羊と共に瑤まるも心ち深く恥じ殺して漢の節を失ざる事金石乃おもくかたく男なり後免まさく漢にかへる時容貌かはりて鬚髪白く衰老乃姿となれども忠烈乃腸かはりて義心絶まず芳名高く千古に飛で今なほ凛然たりとぞ

鄭綮驢雪

長憶飄然灞水涯　此時此景客那知
風前策蹇蕭々遠　橋外衝寒去々遲
飛絮一鞭被野服　落梅雙鬢滌吟鬚
思清如許寧無句　定恐當年有逸詩

ある人鄭綮に詩乃思ひを問　鄭綮こたへて曰　詩思は灞橋乃雪中驢子の背上にありとこそいへりとうつせり　雪はしきりにふりしきるに　蹇馬に策をあてゝ蕭々と物さびしき道をたどり行るに　徘徊乃たぐひて人まれなるに　景色乃気色一入の哀れを之なり　此時いへば世はる一顆の雪中を我ひとり衝出て行く思ひます　風に飛雪は太空に柳絮をちらすがごとく　鞭うち行きれる雪は野服の下袖にせるがごとくあやまちて殊にくらし　雪景気色又にますく趣を凝し　雪乃中に古路を忘れてこそ迷ひ来る驢の跡　小手きておのづからの枝おしとなる何ぞこそ定まりぬども　雪中の寒梅白しければ斜めに倭を濡らすが鬢をあらそふ横によする季良が眉をなやめり　詩人乃吟鬚を添れにとてり　灞橋雪中乃景又ともいへれども詩ふも作りがたし　此景を賞して詩を作る者あらで却く此景を無くする逸詩あらんやと思へること

孫康書雪

偸光不肯学匡衡　千古先生以介名
造物怜人共清白　夜窗無月亦光明
恍疑蔡杖吹煙照　誰信銀河剪水成
他日鳥臺霜凛々　依然氣槩老書生

晉の孫康家貧にして油なし雪に映じて書をよむ又匡衡といふ者も油を買ふに便なければ壁を穿ち隣の火の光を受て学問せり光を受偸む事を同じうすれども孫康は匡衡を学ばずして雪の光によつて映し学ぶ二人ながら志ハよりて今に見るまで名誉をあらはし侍らされば天の造物者も彼二人が貧学を怜むのみや匡衡ハ隣火の清光を偸み今孫康ハ雪の白映をあたへたり此詩は清白を共にとらへてなり其氣の意とハば文学の窓の内にさし入月の光なくとも学徒の光明は昧からざれば又読り諸書と雪の光映あるをや偶も火の光による事あれば藜の杖をおくて照らさるん又天の銀河の水を剪出して雪となす事を彼か信ぜんや是も皆陰陽が自然の天人底で巧なれ水を剪て花となして飛すと作るも同じ格なり後に孫康が学術高時の師範となりしとそ也

歐陽詩雪

塩絮紛々語邀觴　如何説馬到驢黄
比方明禁十餘字　條令昭垂六一堂
穎士筆矛成束手　坡翁戦鉄可争光
棐薇只把霏々説　刪後多安床上床

昔謝安が姪子乃子朗ハ雪の落状を空中に塩を撒
姪にあたりし妹の道韞ハ柳乃絮の風によりて飛起
るに見立しとかされば故人雪を詠ずる句に多くハ

堆塩柳絮を借り来るに宋の歐陽永叔穎州に在り
ある雪の詩を作りしに玉月梨梅練絮白舞鵞鶴
銀等の十餘字を用ひず古詩数百言を賦せしも
これ雪の詩を作るに白きものを比べ用ゆるを
禁ずての所作なれば此歐陽公乃作に続く
ものハ右十餘字禁用乃條目昭に垂る六一堂とハ
いふり歐陽公を六一居士ともいへば也四十餘年後宋の
元祐六年蘇東坡聚星堂にて雪の詩を作るに歐
陽公の体製に倣ひ続て数百言を賦して白戦
体とハ寸鉄を持ざる事といふこれ雪を賦し多
句さらにとを展に坡翁が此語も亦歐陽公と争ひ
べしとなり蔡云乃詩句に霏々と雪の降る気色
を展て一切乃白物に托せずとあり